

てんかん学における我が師、我が同輩

黒川 徹（国立病院機構西別府病院名誉院長
特定医療法人社団三光会誠愛リハビリテーション病院名誉院長）



私のてんかんの研究と臨床において最大の師はCesare T. Lombroso教授（Boston Children's Hospital, Harvard Medical School）である。

私がつてんかんを学び始めたのは九州大学小児科に入局した1963年（昭和38年）であった。当時、竹下研三先生と共にテレメーター脳波を使って保育器の中の未熟児の脳波を何十メートルも離れた別棟の脳波室脳波計で記録した。1965年頃には、国立福岡中央病院未熟児室内に8チャンネル脳波計を設置して、痙攣や交換輸血時の脳波を検査した。今となっては当時としてはいずれも画期的なことではなかったかと思っている。

その頃Lombroso先生からBostonに来ないかと言われ、1970年6月、留学した。毎朝の脳波カンファレンスでは前日に記録したすべての脳波を多くのスタッフ、レジデント、脳波技師の前でめぐりながら所見を述べねばならなかった。Lombroso先生が判読者の斜め後ろに座り、私たちが述べる所見が間違っていたり、見逃したりしていると一つ一つ指摘され、それはかけがえのない勉強となった。2年間のうち、最初の一年は東北大学からの青木恭規先生、あとの一年は京都府立医科大学からの広瀬源二郎先生とご一緒に学び、Gascon先生、Abrom先生、松宮洋一先生のご指導を頂いた。

第20回日本小児神経学会総会（1978年、福岡、会長・合屋長英九大小児科教授）では特別講演「小児てんかんの自然歴」をさせて頂いた。明治以来のカルテの詰ったカルテ庫に埋もれて1,500名ほどのてんかん患者のカルテを満留昭久、花井敏男、高木誠一郎、横田清、南武嗣、柴田瑠美子、湯浅洸、大島康史、前田泰史、松尾誠各先生と共に調べて成し遂げた。当時、倉光正之先生の音頭で福岡臨床と脳波懇話会が毎月開かれていた。松岡成明先生（九大脳外科）、加藤元博先生（同神経内科）など皆脳波の好きな方々ばかりで楽しい会であった。2013年現在も毎月開かれ、同年2月第462回例会では「てんかん治療の歴史」についてミニレクチャーをさせて頂いた。1986年（昭和61年）、福岡てんかん懇話会を中澤洋一先生（久留米大学精神科）と私で始め（世話人：中澤先生）、現在も花井敏男先生を世話人としててんかんを専門とする人々の良き勉強の場となっている。

1987年（昭和62年）から2年間上越教育大学に赴任したときは、新潟地方のてんかんセンターである国立療養所寺泊病院（梶鎮夫院長）で多くの難治性てんかん患者さんの診療をさせて頂いた。

その後赴任した国立精神・神経センターでは有馬正高先生を始め、秋元波留夫先生、島園安雄先生、大熊輝雄先生など日本を代表する蒼々たる方々の大きな薫陶を受けた。高嶋幸男、埜中征哉、加我牧子、佐々木征行、平山義博、花岡繁各先生、レジデントであった山内秀雄、平野悟、今村淳、磯文子、昆かおり、福水道郎、中川栄二、小澤浩、荒木淳、笹木昇、高橋泰子各医師と共に熱のこもった勉強ができた。これらの中の多くの方々は今、日本の小児神経学会で重要な役割を担って活躍していらっしゃる。

三吉野産治先生の後任として赴任した国立療養所西別府病院時代には、第29回日本てんかん学会（1995年）を開催できた。Lombroso, Holmes両ハーバード大学教授を特別講演にお招きし、満留昭久、花井敏男、高木誠一郎、南武嗣、権藤健二郎、田崎宏介、徳永洋一、梁井信司、小川厚、安元佐和各先生、大分てんかん協会の安部綾子さん、朝倉豊美さん等のご協力を頂いて盛会裡に終えることがで

きた。

2001年に定年退職後、福岡に帰って来たが、福岡てんかん懇話会や福岡脳波と臨床懇話会で、花井敏男先生、飛松省三教授、緒方勝也先生を始め、九州大学、福岡大学、久留米大学の小児科、精神科、神経内科、脳外科等の方々と勉強をさせて頂いている。

1975年、福山幸夫先生による河口湖における第9回日本てんかん研究会は周囲の雰囲気と共に格調高いものであった。先生には京王プラザで行われた国際障害者年シンポジウムを始め、多くのシンポジウムや研究会での発表や出版物の共同執筆をさせて頂いた。先日、大田原俊輔先生が亡くなられた。私が1972年にBostonから帰って来て先ず発表したのが新生児痙攣においては律動性棘波或いは棘徐波は一見高度の異常にみえるが予後が良く、一方、suppression-burstは予後が良くないということであった。その時、会場からそれは大田原先生のsuppression-burstと同じかという質問を受けた。それが大田原症候群を知った最初であった。先生が若くて颯爽とした岡山大学講師であられた頃から折に触れ、多くのご教示を頂き、研究班に加えて頂いたり、岡山大学の講義に招いて頂いたりした。感謝の念を込めてご冥福をお祈り申し上げます。

日本てんかん学会は日本小児神経学会と共に、生涯お世話になった。てんかん治療研究振興財団にはその創立の当初から参画させて頂いた。お陰で和田豊治先生、清野昌一先生、八木和一先生、朝倉哲彦先生、細川清先生、渡邊一功先生、山内俊雄先生、福島裕先生その他我が国のてんかん研究を牽引して来られた方々から長年に亘ってご指導を頂いた。現在もてんかん研究をリードしていらっしゃる田中達也先生、兼子直先生その他多くの方と毎年の研究報告会でお会いできている。これも偏に財団のお陰であり、感謝している。

てんかんを病む人はこれからも絶えることはないであろう。病者の苦しみは計りしれないものがある。自分の病を知ったとき誰でもが藁にもすがる思いとなる。そしてより良い医療を求めて止まない。てんかん学は今後とも病む人を助けるべく発展し永遠の流れを生成して行くであろう。



1972年当時のハーバード大学医学部、中央のドーム状屋根はボストン小児病院。向こうの端の2階にSeizure Unitがあった。



2012年11月。ボストン小児病院（ドーム状屋根）。この2階手前が昔働いていたところ。現在は右側の背後に新しく大きなChildren's Hospitalがある。